少女物語

夏月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
少女物語

【Ｎコード】
Ｎ４５４１Ｔ

【作者名】
夏月

【あらすじ】
のんびりしてたのに、いきなり勢いで生きていくことになってしまったある令嬢の話。

馬鹿じゃないの！！

わたくしはある貴族の娘として生まれた。

その貴族は、お金も領地も権力だってそこそこ持ってた。
お父様もお母様も健在で、わたくしの上には家を継ぐことの出来るお兄様だっている。
これ以上は無いっていうくらい、無難な条件が整っている貴族だった。
そんな貴族の姫に生まれたわたくしは、人生勝ち組っていうやつなのだ。

わたくしは毎日、豪華な食事と、豪華なドレスと、豪華な装飾品に囲まれて、豪華な屋敷で暮らしてた。
毎日のお稽古事は良い姫様になるための勉強で、周りに居たのも同じような貴族の娘たちだ。
何処其処の誰々が格好良い、キャー素敵って言う話や、今年の流行はあの国のあのドレス、舞踏会で誰よりも目立つにはどうしたら良いのかって言う話ばっかりしてた。

わたくしはそんな日々が、ずうっと続くと思ってた。

まあ何時の日かお父様の命令で、顔しか知らないような誰かと結婚して子供を産むんだろうな。
そんでもってその家の女主人として君臨して、顔だけの吟遊詩人と火遊びなんかしちゃいながら暮らすんだろうなって思ってもいたけど。
だって家（うち）のお母様がそうしてた。

貴族の姫の義務ってのは家を継ぐための子供を産むこと、後は何しても大丈夫。
子供さえ産めば、旦那様からも一族からも文句は言われない。
だから美容に気を使って、最新の流行を取り入れて、好き勝手やって暮らして良いのよって全身で表現してた。

お父様だって執事に言ってた。

あれはこの家を継ぐ息子を産んでくれたのだから、十分役目を果たした。
あれのための予算を如何使うのもあれの自由だ。
家と家を繋ぐ存在としての真価を発揮してくれたのだから、後は好きにすれば良いって。

お兄様だってお友達と笑ってた。

いっそのこと女に生まれてくれれば良かったんだよ。
そしたら子供産むだけで、後は好き勝手やって生きていける。
こんな面倒臭いこと覚えなくてすむって。

ちょっとむかつかない？

だからわたくしもちょこっとだけ、舞踏会かなんかで家よりも大きな所領を持つ大貴族に見初められたりなんかして、大恋愛の末に結婚したりしないかな、なあんて考えちゃったりした。

馬っ鹿じゃないの！

お父様もお母様もお兄様も、何より、わたくし自身が馬鹿じゃないの！

何の役にも立たないじゃない、そんな事こうなった時に！

誰も助けてくれないし、何処にも逃げられない！

如何したら良いか分からないし、何が起きていたのかも知らなかった！

馬鹿じゃないの、わたくし！！

どうするのよ！！

その時わたくし達は、珍しくも家族全員揃って食事を取っていた。
いつもは誰かしら抜けるから、全員揃うなんて本当に久しぶり。
別に揃ったからって何があったって訳でもないし、話が盛り上がるって訳でもないんだけど。

屋敷のコックは腕が良いから、そこらの舞踏会なんかよりもずっと美味しい食事を作ってくれる。
それを誰がこんなに座ったのよっていうくらい大きなテーブルいっぱいに並べて、順番にちょっとずつ食べる。
好きなものも美味しいからって全部たいらげちゃあいけないの、食い意地張ってるなんて行儀が悪いから残すのがマナーよ。

そんな時に表のほうで大きな音がしたけど、何があったんだろうってわたくしはぼうっとしてた。

だって屋敷には門番が居るし、ここまでかなりの距離がある。
万が一にも何かが来るとは思えなかったから、食事中に席を立つなんてはしたないことはしない。
今日はお父様やお兄様だって居るから、いつもはそれに着いていっている使用人だって屋敷に詰めてる。
だからすぐに治まるって思ってたのよ。

だけど、だんだん音は近付いてくる。

今はもうそれが誰かの悲鳴や怒鳴り声、物が倒れる音だとはっきり判別できるくらいに近い。
ガチャガチャと物がぶつかるような音もしているし、何かを言い争

っているような声も聞こえる。
この音をわたくしはどこかで聞いたことがあるわ、どこだったかしら？

お父様は最初の音が聞こえたときには怪訝そうな顔をしていた。
だけど何かに気付いたようにはっとすると、椅子を蹴倒すように立ち上がって窓に駆け寄る。
何を確認したんだかぎりぎり歯を食いしばっていたと思ったら、今度はドアに体当たりするようにして飛び出して行った。

お父様の様子をぽかんと見ていた家令が、慌ててその後を追いかけていく。

お兄様はもっと変だった。
音に気付いて怪訝な顔をして、お父様が窓に張り付いたことを確認したところまではわたくし達と一緒（わたくし達って、わたくしとお母様よ）
だけどお兄様はわたくし達と同じように確認した後に、お父様と一緒に窓に張り付いた。
お父様が出て行った後もそのまんま、遂にはその場に蹲ってしまった。

わたくしとお母様は、終始ぽかーんとその様子を見ていた。

いきなり開けっ放しのドアから何かが部屋になだれ込んで来て、それがお父様と、お父様に剣を突きつけた騎士だって気付いた時だってそのまま。
わたくしなんか、さっきのガチャガチャが、建国祭のときの騎士達の甲冑の音だったことに納得していたくらいよ。

何してんの！
状況を確認しなさいよ！
何が起こったのよ！
どうするのよ、わたくし！！

よく見なさいよ！！

騎士達は何かを喚いてるお父様に強引に縄をかけると、まるで罪人のように背中で腕を一括りにした。
そしてその縄を強引に引っ張られると、そのままどこかに連れて行かれてしまった。
何人かの騎士が、周りを取り囲むようにそれに着いていく。

騎士達はこちらをちらりと見ると、わたくしからは背中しか見えない、何かをぶつぶつ言いながら蹲っているお兄様にも近付いた。
抵抗する意思が無いことを確認するように、お兄様に剣を突きつけたままゆっくりと囲んでいく。
だらんとした姿のまま、お父様と同じように縄がかけられると同じように連れて行かれてしまう。

その間わたくしとお母様は身動き一つ取らないで、大きく目を開いたままその様子をただ見ていた。

気付くとそこには屋敷中の使用人が集められていて、普段では考えられないような人数でごった返していた。
メイドも家令も馬番も、みなそれぞれの制服を着たまま泣いている。
泣いていないのはわたくし達だけ、こんな状況になっても意味が分からないわたくし達だけが椅子に座ったまま皆を見上げていた。

騎士たちはわたくし達この屋敷の住人を取り囲むように、壁際をぐるりと囲んでいる。
よく磨きこまれた甲冑は、こんな時なのに灯りを受けてきらきらと輝いていた。
建国祭の時の甲冑とは違って、マントは付いていないし装飾も少な

いのに、それでもその姿は自信に溢れていて美しい。

騎士の一人、一際立派な甲冑を着ている一人が、今更になっておろおろしだしたお母様に近付いた。

何かを囁いて立ち上がるのを助けるように腕を差し出したけど、お母様には見えていないようだ。

お母様は囁きを遮るように首を大きく振り、全てを拒否するように両手で頭を包み込む。

わたくしは状況が分からなくてぼんやりしてた。

いつもは身だしなみに余念が無いお母様が、ドレスにソースの染みを付けている何てことが気になってた。

ぼんやりしながら首を傾げて、ワインの入ったグラスに手を伸ばす。

だけど伸ばした腕は震えていて、グラスを掴むことも出来ずに盛大に倒してしまった。

真っ白いクロスの上に広がっていく真っ赤なワイン。

今日は珍しく家族が全員揃ったから、いつもよりもちょっと上等なワインだって言っていたのに。

って何見てんのよ！

今重要なのはそんなことじゃないでしょ！

騎士たちに甲冑についている紋章が何処のものだと思ってんのよ！

あの紋章を間違える訳無いでしょ！

何のためにあなたの目は付いてるの！

よく見なさいよ、わたくし！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4541t/

少女物語

2011年10月9日01時41分発行